

## ベケット作品における痛みと表象の問題

対馬 美千子

現代社会の表象の状況において、ベケットの作品が読まれ、見られ、聞かれるということにはどのような意味があるのだろうか、ベケットの作品は私たちをどこに差し向けるのだろうか。本発表では、ベケット作品は、私たちを、表象そのものの限界へと導き、そこで苦しみや痛みとしてあらわれる「人間的なもの」に出会わせるという可能性について、アガンベンの証言論、インファンティア[言語活動をもたない状態]についての考察を通して考察する。

アガンベンの証言論は、証言という話す主体が話すことの不可能性に耐えながら話すという人間的なるものの限界の経験に私たちを導く。アガンベンはその限界経験において、純粹で超越論的な経験である、人が話すということ、すなわち、人間的なものが生物学的生を生きる存在と言葉を話す存在に分裂しているという事実を私たちを連れ戻す。

ベケットの作品は、アガンベンのような超越論的な意味での経験、人が話すことにおける人間的なるものの分裂の経験に近づき、それをなんらかの形で触知可能にする試みである。ベケットの作品は、私たちを経験的「内容」を剥奪された次元、あるいは表象の限界に連れていき、そこに現れる「人間的なもの」、生物学的生を生きる存在と言葉を話す存在の分裂自体である「人間」に出会わせる。その例として、『モロイ』、『わたしじゃない』を考察する。

ベケット作品に現れる分裂自体としての「人間的なもの」のうちに、私たちは、直接的ではないかもしれないが、耐えがたい痛みや苦しみを見出す。生物学的生を生きる存在と言葉を話す存在の分裂を生きる経験は、ベケットにおいては、主に話すことの不可能性に耐えながらも言葉を話し続けなければならない苦痛として現れる。そして、この言語を話し続けることの苦しみは、ベケット作品の至るところに見出される身体的痛みと不可分の関係にある。『モロイ』に示されるように、話すことの不可能性を十字架のように背負いながら話し続けることと、身体の痛みを十字架のように背負いながら前進することはベケット作品では重なっている。ベケット作品にみられる言語的経験における痛みと身体的痛みは、双方とも、ラディカルな受動性に特徴づけられるが、ベケットは表象の限界において、このような痛みと受動性が一体となった、いわば、パッションの知を私たちに示そうとしたと考えられる。

The Problem of Pain and Representation in Beckett's Work

Michiko TSUSHIMA

What does it mean that Beckett's work is read, seen, and heard under contemporary conditions of representation? Where does Beckett's work direct us? In this presentation I argue that Beckett's work returns us to the limits of representation where "the human" appears as pain and suffering. Agamben speaks of "infancy" as a transcendental experience of language in which language is experienced as the pure fact that one speaks, or the place of the human is experienced as the fracture between the living being and the speaking being. This presentation shows how this experience of "the human" as the fracture is revealed in Beckett's work, especially in *Molloy* and *Not I*.

日本サミュエル・ベケット研究会  
Samuel Beckett Research Circle of Japan